

終った。

長男元仲も、次男温良庵も、その学習青年時代が短期未熟であった為にやがて終焉の運命を辿り(速成栽培成らず)、一人、養子として迎え入れられた良閑を祖とする河口家の一人、代々土井藩御側医を守り、中の一人、河口信任は蘭書を得て解剖書『解屍編』(二七七二)を京に刊行し、河口信順は杉田玄白の弟子となり玄白晩年の清曠隣に起居し、『蘭東事始』の筆写者の一人、富山の長崎浩斎と親交あり、又、「大解嘲」を筆写した。河口信寛は杉田成卿の門人となり「梅里余稿」「梅里遺稿」を編輯し、大学東校教授補となった。

それらの系譜を整理して発表する。

(古河市・開業)

大槻玄沢『蘭畹摘芳』について

宗 田 一

大槻玄沢の西洋物産学に関する著訳書としては、『六物新志』とその続編ともいふべき性格の『蘭畹摘芳』がある。前者は木村兼葭堂の『一角纂考』とセットにして、兼葭堂蔵版で上梓された(天明八年(一七八八)に知友に頒布された後、寛政七年(一七九五)に市販本となった。流布本には同年正月の奥付をもつが版元の異なる二種の版本がある。葦屋重三郎の名がないのが後版である。』

後者は初編三巻が上梓(文化一四年、一八一七)され、次篇三巻の目次の予告があり、第五編までの刊行が計画されていたが、未刊にとどまった。刊行中絶の理由は奈辺にあったのか、また刊行開始時点で稿本の定本があったのか否かも検討されねばならない。

＊

『蘭腕摘芳』には門人らが集録した写本が残され、初編から四編まで各々一〇巻、附録二巻から成る全四二巻本である。

玄沢の子玄幹（茂積）は、四編巻首の序文で、玄沢門の高弟、笠間牧野藩（茨城県笠間市）の侍医長谷川宗仙（宗徳、興）が三編までをすべて校録し、四編巻之三までを玄沢の生前（文政一〇年、一八二六没）に筆録していたとして、その労を謝している。

玄幹はその後、玄沢の遺稿中から物産関係のものを択び九巻本として校録、さらに附録二巻を加え、ここに四十余年かかった『蘭腕摘芳』稿本全四編四二巻の筆録を終えた。

もつとも、玄幹のいうように長谷川宗徳がすべてを集録したのではなく、初編巻一～六は豊間・蓮沼清緝筆録、土浦・山村才輔（昌永）校訂、巻七は一関・吉川良祐（定惟）が筆録していた。長谷川はその後を継統筆録したのである。

この門人らの集録は、初編巻首の山村才輔の引文（寛政

四年、一七九二）にいうように、玄沢が訳してきた未定訳稿の散逸を防ぐため、門人らが取敢えず筆録して整理したもので、全篇が系統立って編集されているわけではなく、玄沢以外の訳者のものも含まれている。例えば中井厚沢の『弼離力考』、倉持成徳（吉田長淑）の『神物知新』、馬場貞由と共訳の『野羊功能』・『綿羊訳説』のほか、栗本瑞見（昌蔵）のものも混在している。

これらの未定訳稿を、他日をまって刪正した上で『六物新志』の続編のようなものにした、と考えられていたのである。

＊

右筆録本初編の巻末に、「右十巻校正ヲ経サルノ原稿ニ係ル。最後其数品ヲ択取テ修文シ諸図ヲ附セリ。以テ六物新志ノ続編トナサントシ分テ四巻トナス。コレ人ノ徳憑ニ因テ再校成ル所ナリ。コレ先生他見ヲ許シタマフモノナリ。行々木ニ上セントス。其品目左ノ如シ……」

しかし実際に上梓された前記の刊本は、五巻本でなく三

巻本であった。これは、当初の刊行計画案が変更され、各編三巻建てとなり、そのため各編の収載項目の若干の入れ替えがあった。

この入れ替え変更については玄沢自身の意向が加わっているものと考えられ、定稿の遅れそうなのは後廻わしとされたものなのだろう。

刊本巻三の玄幹の跋文（文化二年、一八一五）には、文化九年（一八一七）秋に玄沢が仙台侯に随駕して国許へ帰った留守に、江戸に残留していた玄幹が校訂を加え、江戸に帰った玄沢がさらに訂正を加えた旨記されていて、巻一は吉川良祐と長谷川宗僊が筆録、巻二は吉川に代って森宗沢（豹）と長谷川が筆録、巻三は長倉道輔（元之）と大矢林沢（之則）が筆録、全巻を玄幹と山村才輔が校定に当たった。

文化一四年（一八一七）三月上梓の初版本は、大坂の河内屋大助・同儀助、江戸の須原屋茂兵衛・同伊八の合梓で、二年後の文政二年（一八一九）に同じ書肆名で再版されている。しかし、次編以降は続刊されなかった。

続刊中絶の理由は詳かでないが、私見では宇田川玄真・

榕菴の『遠西医方名物考』全三五巻が数年後の文政五年（一八二二）から開始され、わずか三年の短期間で全巻完結（但し補遺は別）という超スピードで行われたことが関係あるように思える。

『遠西医方名物考』は江戸の須原屋伊八、大坂の河内屋太助・同儀助の合梓で、出版書肆が重複しているのもそれを示唆する。

『遠西医方名物考』は『西説内科撰要』の増訂版上梓に合わせた刊行で、新着の原書の新知識を活用した西洋薬物百科全書の性格をもった大冊で、西洋内科に必要な薬物知識の集大成として、西洋内科を学ぶために便利なものとして好評を博した。

一方、『蘭腕摘芳』は長年にわたる玄沢の訳稿をもとに編纂され、追加補訂はあったとしても、時代の要求にマッチしなくなっていたのが刊行中絶の理由かも知れない。それが玄沢自身の発案なのか、書肆側の要望だったのかはわからない。

しかし、『蘭腕摘芳』筆録本は玄沢の訳業を知る上に重要な史料で、とくに訳述の時期を記しているため、玄沢の

年譜（『磐水年譜』、『磐水存響』坤所収）を補う上に欠かせない。

（京都市）

下野国壬生・鳥居藩における解剖図 について

石 崎 達

栃木県（下野国）下都賀郡壬生町は戦国時代より大名の城を構えた町で、正徳二年（一七二二）以来幕末まで鳥居家の所領三万二千石の城下町として栄え、日光連山に源を發する黒川と小倉川は所領の南端で合流し黒川となり、これは渡良瀬川と合流して利根川に合流している。したがって舟便を利用した物産の集散地として商業的にも栄え、舟町と称する区画には廻船問屋があった。

鳥居家は壬生を一六〇年余にわたり領有し、隣に宇都宮藩（戸田家八万石）をひかえ、又天領である商業中心地栃木（現在栃木市）とも関連して文化の中心の一つでもあった。

幕末領主は新知識の吸収につとめ、天然痘の流行に対処して若殿を始めとして主として少年以下に種痘を実行し、天然痘の害を最少にいとめてゐる。